

根拠を明確にして自分の意見をしっかりもち、自信をもって述べるができる生徒を育成するための授業の工夫
～教師の適切な関与による「能動的な教え合い・学び合い活動」の実践～

高橋 彼環

1. はじめに

(1) 本研究を踏まえた提案

本研究で提案することは、根拠を明確にして自分の意見をしっかりもち、自信をもって述べるができる生徒を育成するために、単元を通して課題解決をはかる国語科の学習の中に、教師の適切な働きかけによる「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れることが重要であるということです。

ここでいう、「能動的な教え合い・学び合い活動」とは、学習課題の解決に向かう過程で、論理的な思考をしている生徒の思考過程や、既成の枠にとらわれない発想をしている生徒の発想内容について、集団で共有した上でさらに学習を深めていく活動を指します。

(2) 神奈川県中学校教育課程研究会の国語科の研究主題及び趣旨との関連

平成 27・28 年度神奈川県中学校教育課程研究会の国語科の研究主題及び趣旨は次のとおりです。

研究主題	趣 旨
生徒一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善	<p>生徒一人ひとりが、国語を適切に表現したり、正確に理解したりする社会生活に必要な国語の能力の基礎や国語を尊重する態度の育成をさらに推進する必要がある。そのための指導計画、評価計画や学習指導と評価の工夫・改善について研究する。</p> <p>〈主に次の点について具体的に研究する〉</p> <p>① 国語科における基礎的・基本的な知識及び技能の習得とこれらを活用して思考力、判断力、表現力等をはぐむための年間指導計画、評価計画及び学習指導の工夫・改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・育成すべき言語能力及び学習過程の明確化と適切な評価規準の設定 ・生徒の実態に応じて言語活動を充実させるための工夫・改善 ・生徒が見通しを立てたり振り返ったりする活動の工夫・改善 ・伝統的な言語文化に関する指導の工夫・改善 ・相手や目的に応じて自分の考えを的確に書いたり、発表したりする指導の工夫・改善 <p>② 指導と評価の一体化・評価方法等の工夫による授業改善</p> <p>③ 各教科等や小学校・高等学校との関連を図った取組</p>

(下線は筆者による)

本研究では、上記研究主題を踏まえつつ、本校の生徒の実態に応じた研究テーマを設定し、特に下線部に焦点をあてた実践研究を行いました。

2. テーマ設定の理由

(1) 生徒の実態を踏まえた課題意識

① 生徒の実態

本校の生徒の傾向として次のようなことが挙げられます。

- 心の中には思ったことや考えたことがあるのだけれど、それをうまくまとめて言葉にできない
- 結論だけを短く簡単に答えることはできるけれど、根拠を明確に、具体的に説明することができない
- 自分の考えにあまり自信がもてずに発言をためらってしまう

その他に、もちろん、「一生懸命考えても答えが浮かばない」こともありました。これらのことを何とか解消し、「根拠を明確にして自分の意見をしっかりともち、自信

をもって述べる事ができる生徒」を育成したい、と思いました。

また、過去、教育相談の面談や三者面談等で、生徒の学習面について話をする時など、「勉強で分からないことがあっても、各教科担当の先生に何となく質問しづらい」という話を耳にすることがしばしばありました。このような傾向は、特にその生徒にとって不得意な教科に多いので、学習の理解度はますます低下してしまふこととなります。

もちろん、我々教師側の、質問を気軽にしやすい雰囲気作りや、生徒たちとの信頼関係の構築が最も重要であり、当然ほとんどの教師がその実践に努めているに違いないと思うのですが、教師が思うよりも遙かに、そのような生徒たちにとっては質問するということは、なかなか難しいことのように思いました。

そこで、1年生を対象に、1学期にアンケートを実施し、生徒たちの実態を把握することにしてみました。結果は、クラスの約4分の1程度の生徒が自分から積極的に質問できないと回答しました。理由を挙げると、

<授業中>

- 恥ずかしいから
- 気まずいから
- 席が遠かったりすると大きな声を出さなければいけないので他の人に聞かれてしまうから
- 聞ける友達がいないから
- 何か話しかけにくいから
- 家族のほうが質問しやすいから

<授業以外>

- 休み時間に聞くのは恥ずかしいから
- 聞きに行くのが面倒くさいから
- 聞ける友達がいないから
- 友達の時間を極力とらないようにしたいから
- 休み時間は遊ぶから

というものでした。割合としては、1年生の1学期ということもあり予想よりも少ない割合でしたが、思春期を迎えつつある生徒たちにとって授業中や授業後に教師に質問をすることは、友人やクラスメイトの手前、気恥ずかしく感じてしまい、行動に移せないことも多いようでした。

また、教師に質問できたとしても、解説を聞いている時にも仲間の視線を意識してしまったり、理解できないという恥ずかしさもあつたりして、最後までしっかりと理解できていないのに「分かりました。大丈夫です。」などと理解できたように受け答えをしてしまふことも多いように思います。

それならば、ということで、授業後や放課後などに友達と一緒に質問をしに行くようにと勧めても、億劫がったり諸活動で忙しかったり、なかなか実行できないようです。

② それまでの授業の反省

上記で述べた問題を解決するために、次のような手順で実践を行うようにしてきました。

- ア「発問について誰とも相談せず、個人で考えさせる時間をできるだけたっぷり確保する」
- イ「答えが出た人は、なぜ自分がそう考えたかを、根拠を明確にしたり具体例を挙げたりして、他の人に説明できるようにしておく」
- ウ「なかなか思いつかない場合は、どんなに短い言葉でも良いから自分の言葉で答えられるように答えを用意する」
- エ「座席の近くの人たちと意見交換を行い、自分の意見を再構築する」

このような手順を踏んでから、発問についての答えや意見を全体で確認していきます。

エの意見交換については、座席の近くの4人から3人で少人数班を作らせ、班で意見をまとめさせ、班ごとに意見を発表させることも行ってきました。

そして、

- オ「全体で出た意見や確認したことを踏まえて、自分の考えを深め、まとめる」

とし、「個 → 小グループ → 個 → 全体 → 個」の流れを作るようにしてきました。

この実践を行うことによって、それ以前と比べ、「根拠を明確にして自分の意見をもつこと」が習慣づくようになりました。

また、他者と意見交換をすることにより、自分の考えを広げ、深められるようになりました。

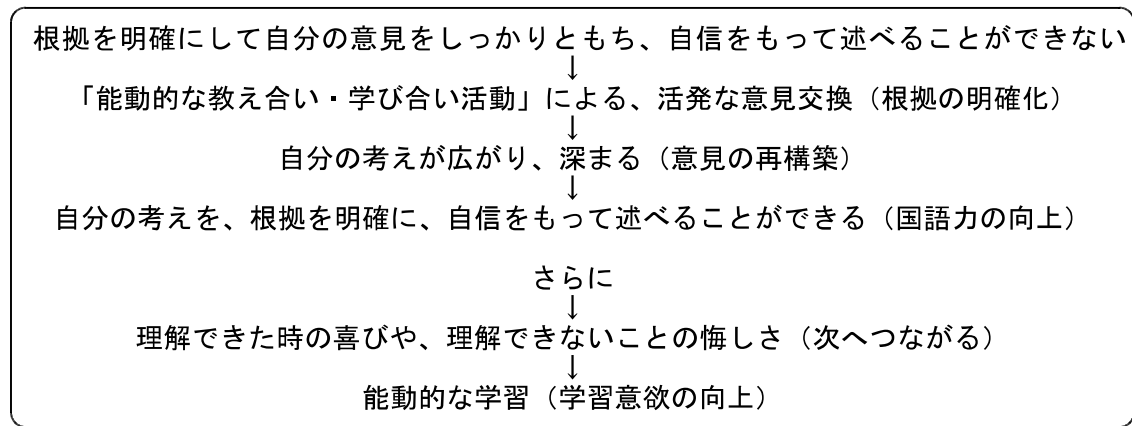
さらに、全体の場ではなく近くの座席の者同士という、気軽な場で他者と意見交換をすることによって、自分の意見を自信をもって述べるできるようになりました。

しかし、個人で考える時間や作業をする時間に一生懸命考えようとせず人任せにしてしまったり、ポーっとしてしまったり、やる気が見られなかったりした生徒も見られました。また、座席によっては、国語が不得意な生徒同士が集まってしまっているケースもあり、そのような場合は有意義な話し合い活動が進まず、そのために生徒たちのやる気もそがれている場合が多く、その都度、教師がフォローするようなケースもありました。

上記のア～オの過程では、単元ごとに設定する国語科の授業としての目標、つまり国語科の内容（指導事項）についての視点が不足していることが課題でした。

(2) 課題解決のための手だて

このたびの研究に取り組むにあたり、上記②で述べた過去の実践を踏まえ、今まで実践してきたことを更に深めるような言語活動、座席や班などの既成の枠にとらわれない、教師の適切な関与による「能動的な教え合い・学び合い活動」を実践して充実させ、生徒一人ひとりの国語力と学習意欲を高めたいと考え、以下のような流れを考えました。



「能動的な教え合い・学び合い活動」を授業内に取り入れることによって、この方法なら分からないことがあっても生徒同士で気軽に教え合い、学び合うことができ、しっかりと理解できる生徒の数がより増えるのではないかと考えました。

そして、そこから発展して、「理解できた時の喜び」や、「理解できないことの悔しさ」といった気持ちが増えていけば、生徒同士だけでなく教師にも気軽に質問ができるようになるのではないかと考えました。

日常生活や社会生活、他教科等の学習活動を充実させていくためにも、言語を扱う国語科の授業において、学習指導要領に示される内容（指導事項）を、適切に指導・評価し、生徒に身につけさせることが大切です。

また、本校の生徒の実態を考慮したとき、課題意識をもって楽しみながら学習に臨み、教え合い、学び合いながら、互いに認め合うことができる環境を整えることも大切です。それらを満たすためには、単元を通して課題に向き合い試行錯誤しながら課題解決を図る学習に取り組ませることが有効だと考えました。

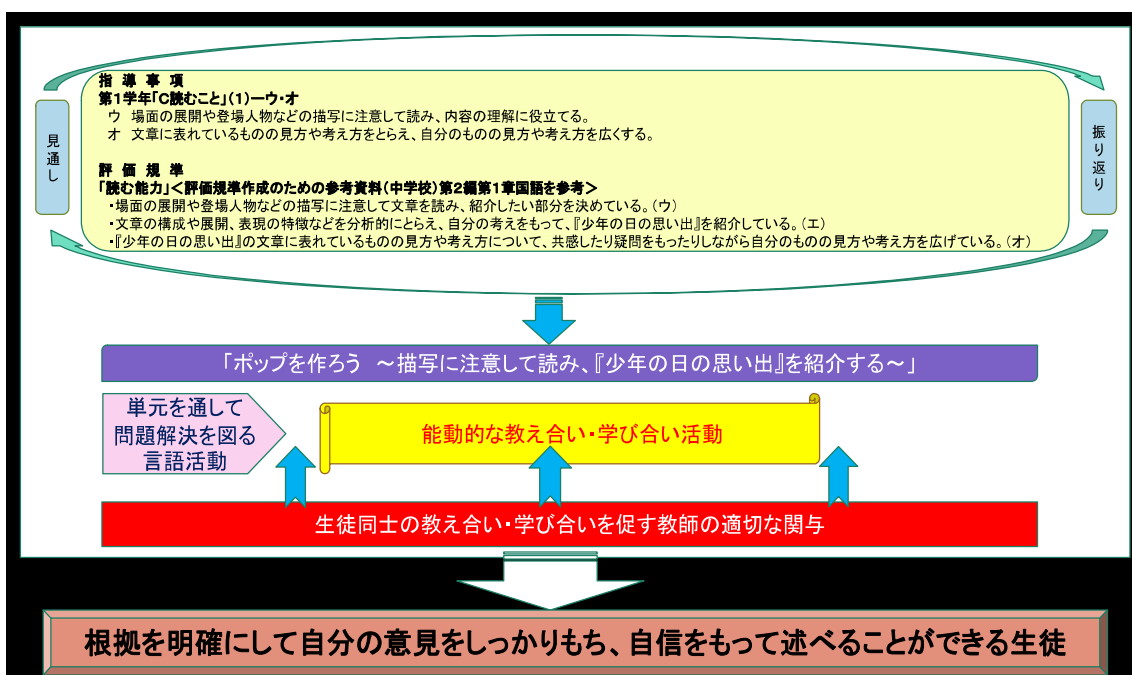
そして、単元を通して課題解決をはかる国語科の学習の質を上げるためには、教師の適切な関与が重要だと考えました。教師の適切な関与によって、生徒が「能動的な教え合い・学び合い活動」を行っていけば、生徒同士の関係性が深くなります。国語科の学習場面では、国語科の内容（指導事項）を身に付ける過程で、このような関係性を築いていくことが大切です。

教師はもちろん、学習の主体である生徒自身が、学習過程や身につける力についての見通しをもち、単元を通して課題解決をはかり、学習後には学習過程や身につけた力を振り返って自覚していくという流れを大切にしながら、授業実践を行いました。

以上のようなことを考え、試行錯誤をしながらではありますが、少しずつ、「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れた授業を実践し、生徒たちの変容を観察していただくことにしました。

3. 研究内容

(1) 研究構想図



この構想図は、本研究で提案する、単元を通して課題解決をはかる国語科の学習の中に、教師の働きかけによる能動的な教え合い・学び合い活動を取り入れることを示しています。この構想図で単元を通して課題解決をはかるとは、教師が提示する「ポップを作ろう～描写に注意して読み、『少年の日の思い出』を紹介する～」という学習課題の解決に向かい、生徒が学習後に身に付ける力を理解し、また、言語活動のプロセスについての見通しをもって学習し、学習後にプロセスを振り返りながら身に付けた力を自覚するという学習の流れのことです。

本単元の学習目標は学習指導要領に示される指導事項を身に付けることであり、評価規準は指導事項に応じたものとします。

このようにして学習を進める生徒に対して、必要に応じて適切に教師が関与し、生徒同士の教え合い・学び合いを促していきます。

(2) 研究授業までの取組

平成27年度の私の担当は1学年であったので、「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れるための下地作りとして、まずは過去の取組と同様の実践をすることから始めました。

毎回の授業において、なるべく話し合いや学び合いの時間を設定するように心がけました。その際、教師の発問に対して、まずは隣の席同士(2人)で、慣れてきた頃に少人数班(4人)を作らせて、話し合いをさせたり、意見をまとめさせたり、学び合いをしました。班の隊形も、手裏剣型、トライアングル型など、工夫してみました。

<実践例> 物語『にじの見える橋』(杉みき子 著:光村図書「国語1」)

『少年は大きく息を吸った。この前、にじを見たのはいつだったろう。この子たちくらいの小さいころ—いや、もっとずっと前のような気がする。もしかしたら自分は今、生まれて初めてにじを見たのではないかと、少年は思った。』

☆下線部について、「少年はなぜそう思ったのか？」を考えさせる。

ア 誰とも相談せず個人で、必ず自分の考えを出し、ノートに書く(教師は、考えのヒントになるようなことをいくつか伝える。また、自分なりの言葉や表現で良い、短くても良い、ことも伝える)。

イ 自分の考えを隣の席同士で発表し合う。

ウ 少人数班の形を作り、司会者を決める。少人数班で自分の考えを発表し合う(その際、自分の初めの考えと変わっていても良い。必ず全員発表する)。司会者は発表の場を取り仕切る。

- エ 挙手制でクラス全体に向けて発表し合う（教師は答えに対して更に掘り下げて質問したり、助言したり、軌道修正したりする）。
- オ 最後に改めて、自分の考えをノートに書く。また、他に思ったことなども書く。

この方法は他に、物語や説明文の、段落分けを考えさせる時などにも用いました。毎回の授業の中にこのような活動をできる限り取り入れることで、「能動的な教え合い・学び合い活動」の実践に向けて下地を作っていました。

(3) 研究授業の詳細

① 教材について

2学期末に、「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れた研究授業を行いました。教材名は、『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ 著、高橋健二 訳：光村図書「国語1」）です。

『少年の日の思い出』は大きく2つの部分に分かれており、前半の語り手は「私」、後半は「私」の「客」が「僕」として思い出を語っています。

後半の「僕」と「エーミール」の2人をめぐる場面では、少年たちの心の揺れ、葛藤を、「僕」の心情、「エーミール」の様子や行動、事物や情景について様々な言葉で描写されています。

2人の少年は10～12歳の少年であることや蝶集めに熱心であることなどの共通点の他は、価値観などは大きく異なるものとして描かれています。特に「エーミール」の心情は彼の行動から読み取ることになるため、読み方によって印象が大きく変わるところでもあります。

それまでに学習してきた物語、『にじの見える橋』、『星の花が降る頃に』、『大人になれなかった弟たちに…』では、場面の展開、登場人物の心情や行動、気持ちの変化、情景描写について注意しながら読み、作品の理解を深めることを学習してきました。

読みを深める手立てとして、これまで述べてきたように、「個人で考える時間」、「ペアや少人数班で意見交換をして、自分の考えを再構築する時間」、「再度個人で考え、自分の考えをまとめる時間」をたっぷりと確保する、学び合いを重視した言語活動を4月から行ってきました。

しかし、読み取る力は個人差が大きく、全体的には読み取ることが苦手な生徒が大部分を占めていました。

また、作品から自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりして自分の考えをもつというところまでは、それまであまり学習してきていませんでした。

『少年の日の思い出』は、それぞれの登場人物を様々な角度から捉え、様々な描写に着目することで、自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりすることができる教材です。

この研究授業で「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れ、ものの見方や考え方を広げ、深めさせるだけでなく、自分の考えをもたせたいと考えました。

そこで、それまではペア学習や少人数班での「教え合い・学び合い活動」などの言語活動にとどまっていたが、この単元の学習活動では座席という枠を取り払い、「生徒は教室内を自由に移動し、教え合い・学び合い活動をして良い」ということにしました。

② 学習活動について

この研究授業では、ものの見方や考え方を広げて深め、自分の考えをもたせるため、『少年の日の思い出』を紹介するポップの作成を行うことにしました。

ポップの作成を通して作品についての理解を深めさせるとともに、文章に表れた登場人物のものの見方や考え方などについて他者と意見交換をすることで、自分のものの見方や考え方を広げさせ、自分の考えをもたせることを目標としました。

そのために、ポップの作成時から机間移動を自由としたり、作成後に行う発表会の場では必ず質問や意見、感想を交換する時間を設けたりするなど、話し合うこと、「能動的な教え合い・学び合い活動」を重視した単元計画としました。

また、学習活動となるポップの作成のため、本文に書かれた情報の整理とともに、読み手の興味をひくために意図的な文章を書くこと、引用の仕方や選定、意図的なキャッチコピーの書き方、文章や絵などをどのようにレイアウトするか、などをしっかりと理解させ、検討させる時間をたっぷりと確保するようにしました。

③ 単元(題材)目標について

単元(題材)目標を、以下のように設定しました。

<中学校学習指導要領解説 国語編より>

「読むこと」(1) —ウ・オ

ウ 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てる。
オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広
くする。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1) —イ(イ)

(イ) 語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、語感を磨く。

④ 単元の評価規準について

単元の評価規準を、以下のように設定しました。

<評価規準作成のための参考資料(中学校) 第2編 第1章 国語 を参考>

評価の観点	評価規準
国語への 関心・意欲・態度	・課題に沿って引用文を選び、その理由を進んで紹介しようとしている。
読む能力	・場面の展開や登場人物などの描写に注意して文章を読み、紹介したい部分を決めている。(ウ) ・文章の構成や展開、表現の特徴などを分析的にとらえ、自分の考えをもって、『少年の日の思い出』を紹介している。(エ) ・『少年の日の思い出』の文章に表れているものの見方や考え方について、共感したり疑問をもったりしながら自分のものの見方や考え方を広げている。(オ)
言語についての 知識・理解・技能	・文章を読んで意味の分からない語句を辞書で調べ、文脈上の意味を考えている。(イ(イ))

⑤ 単元の指導計画について

単元の指導計画を以下のように設定し、実施しました。

<第1時>

○ポップの画像を観てポップについて知る。

どのようなポップを作るかをイメージさせるために、I P a d を教室のテレビに繋ぎ、インターネットから様々なポップの画像を探して、例として紹介しました。

様々なポップに、生徒たちは興味津々で楽しみながら観ていました。(※画像1)



【画像1】

○単元の学習の流れについての説明を聞き、学習の見通しをもつ
(「学習プラン」プリントを配布)。

○単元の学習のねらいと評価の観点について理解する。

生徒には、「学習プラン」のプリントを配布し、「身につけたい力」、「評価規準」、「単元の学習・評価計画」、「発表会：班内で一番評価の高い作品を決めるための評価の観点」について予め説明をして、学習の見通しをもたせるとともに、目指す評価の観点をしっかりと理解させ、評価の明確化を行いました。

○引用、キャッチコピーなどの概念を知る。

教科書の単元『おいしい読書 読書紹介をする』を参考にしながら説明をしました。
また、本校では朝読書を実施しているので、持参している本の帯やカバーなどを参考にしてみることも助言しました。

○分からない漢字や語句をチェックしながら『少年の日の思い出』を全員で通読し、内容を理解する。

<第2時>

○分からない漢字や語句を調べ、理解する。

第2時は活動の場所を学校図書館に移し、国語辞典や漢和辞典を活用して学習に取り組みせました。

○ポップの大まかな構想を練り、思いついたことなどをメモしておく。

<第3・4時>

○引用したい文を決める。

○「読み手にこのような思いをもってもらいたいから」など、「どういう意図をもってその引用文を選んだのか」、その理由を、文章に表れたものの見方や考え方を捉えた上で説明できるようにワークシートに書く。

○引用文が読み手に何を伝えようとしているかを考え、ワークシートに書く。

○キャッチコピー、あらすじを考えてワークシートに書く。

○ポップの下書きをワークシートに書く。

予め「学習プラン」で示しておいた、「発表会：班内で一番評価の高い作品を決めるための評価の観点」を再度確認し、これらの観点を満たすような作品を目指すよう、改めて話をしました。

<発表会：班内で一番評価の高い作品を決めるための評価の観点>

- ☆ 「読み手にどのような思いをもってほしくて」など、自分がどのような意図をもってその引用文を選んだのか、理由がはっきりと分かりやすく、具体的に述べられているか。
- ☆ 文章の構成や展開、登場人物などの描写、表現の特徴などを分析的にとらえ、自分の考えをもって『少年の日の思い出』を紹介しているか。
- ☆ 文章に表れているものの見方や考え方について、共感したり疑問をもったりしながら自分のものの見方や考え方を広げ、自分の考えを述べられているか。
- ☆ 聴き手の興味や関心を引くようなキャッチコピーが付けられているか。

この時間以降、「生徒は教室内を自由に移動し、教え合い・学び合い活動をして良い」ということになりました。

① 生徒同士の「教え合い・学び合い活動」の様子とその評価

普段の授業の中で生徒たちは、「授業中に教師の許可無く勝手に座席を離れない」という決まりをしっかりと守って学習に取り組んでいます。座席の枠を取り払われた生徒たちは、初めは戸惑いながら恐る恐るといった雰囲気でも友の所へ移動していましたが、立ち

上がる生徒が増えてくるやいなや、あっという間にあちらこちらで「教え合い・学び合い活動」が始まりました。

ここでは主に、ポップを作る際に引用する言葉とその理由についての交流が多く見られました。教師は、理由を表現させることで、文章に表れているものの見方や考え方をとらえた自分の考えをもたせることを意図しています。

交流の中では、普段、ペア学習や少人数班での活動時にはあまり積極的に発言をしなかったり諦めるような雰囲気が見られたりした生徒が、非常に生き生きと、自分の言葉を使いながら意見交換をしたり質問をしたりする姿が多く見られました。

また、そのグループの中で分からないことがあると、別のグループの所に行って情報を得たり、質問をしたり、教えてもらったりする場面もありました。

また、キャッチコピーの表現は、お互いに読み合って意見交換をし、より良い表現になるように話し合う場面も見られました。

【※画像2】



【画像2】

② 関与した場面での教師の意図

私は、生徒たちの交流の中を、助言をしたり、脱線しそうな場面を軌道修正したりしながら回り、机間指導を行いました。

その中で、引用の理由を自分の言葉でどのように表現したら良いのかと、迷っている生徒がいました。

グループ内で話し合われていることの中には、全体で共有することで、それぞれの考えが広がったり深まったりするものがあるはずですが、私は、この生徒が迷いながら考えた理由を全体で共有することで、他の生徒も共に考え、学習目標の実現に向かうと思いました。そこで、本人に声をかけて、全体に向けて発表してもらうことにしました。

すると、その発表を聞いて、参考にしたいと思う生徒たちがその生徒の席に集まり、もう少し詳しく話を聞く姿が見られました。

グループ活動が活性化しました。そこで、私は、個別の指導が必要な生徒に声をかけていきました。また、そのような生徒が他にもいないか、学級内全体を見渡すようにしました。

その後、グループでの交流を終え、個人で考えをまとめながらポップを作成していきました。ここでは、私は、個別の指導を丁寧に行っていました。

個別に指導する視点と、全体を見渡す視点をもっていることで、別の生徒が挙手しているところへ素早く行くことができました。

その際、今までの授業では自分から積極的に質問をしなかった生徒が、周囲の目もまったく気にせず、自ら質問を何度も分かるまでしてくる場面が多く見られました。

最後にもう1人に発表してもらい、この授業のまとめとしました。そして、次の時間へとつなぎました。

このように、過去の実践と比べ、この単元では、私が意図したような「能動的な教え合い・学び合い活動」が展開されていました。

ただ、予想通り、このワークシート作成の取組が生徒には1番難しかったようで、かなり時間がかかりました。特に、「なぜ自分がそう考えたかを、根拠を明確にしたり具体例を挙げたりして、他の人に説明できるようにする」ということが不得意な生徒が多く、「どういう意図をもってその引用文を選んだのか」や、「引用文が読み手に何を伝えようとしているか」の項目に対して、「教え合い・学び合い活動」が1番多く行われていました。

<第5・6時>

○ポップを作成する。

○発表会に向けて準備する。

ポップの作成作業では、次々に新しいアイデアが生まれたり、他の生徒の作品を見て参考にしたりして、とても楽しそうに作業を行う生徒の姿が見られました。【※画像3】



【画像3】

<第7時>

- 班内で一番評価の高い作品を決めるための評価の観点を確認する。
- 少人数班に分かれて発表会を行う。
- 一人が発表し終わったら、質問や意見、感想を出し合う。
- 班内で一番評価の高い作品を決める。

少人数班の発表会では様々な作品が見られ、聴いている生徒たちも楽しそうでした。発表後の質問・意見・感想タイムでは、発表者への質問や意見から討論に発展した班もあり、充実した様子が見られました。(※画像4)



【画像4】

引用文の選定は、意外にも生徒一人ひとりが様々な箇所から選定しており、偏りは見られませんでした。読み手に比べて、興味や関心、感じ方、価値観が多様多様であることを改めて実感し、生徒たちもそのように感じたようでした。

- 各班の高評価作品作成者が、全体に向けて発表する。
- 一人が発表し終わったら、質問や意見、感想を出し合う。

各少人数班から代表として選ばれた生徒が、全体に向けて更に発表しました。作品は、I P a d で撮影したものを教室のテレビに映し出しました。

(※画像5)

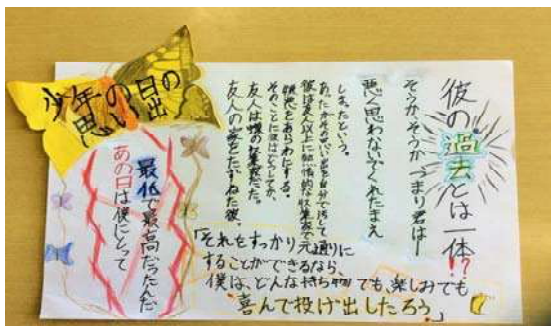
代表者の作品はさすがに、本単元の目標を十分に満たしているものが多いと思いました。また、デザイン、発表の仕方なども素晴らしいと感じるものが多かったです。

(※一部の作品を紹介：

画像6・7・8・9・10・11・12・13)



【画像5】



【画像6】

<引用文>

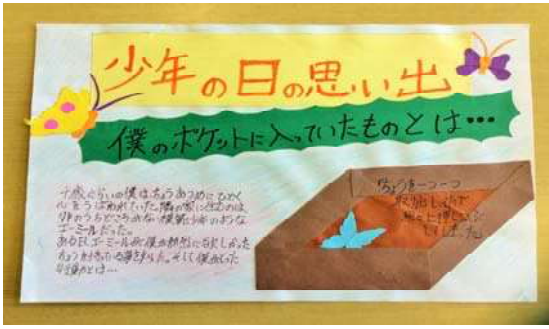
『それをすっかり元通りにすることができたら、僕は、どんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。』

<引用文を選んだ理由>

自分が犯してしまったことを元通り、つまりなかったことにできるのなら何でも差し出す、という「僕」の人間らしさを伝えたかったので、この文を引用しました。己の欲望に負け、間違いを犯し、後に我に返ってなかったことにできるのなら何でもしまし、と思うのは、人間の大きな特徴といえます。

<引用文は読み手に何を伝えようとしているか>

「僕」の人間性や、己の何かで帳消しにしようとする卑しさが伝わってきたので、そんな人間らしさを伝えたかったんだと思います。また、どんな物でも喜んで投げ出すという表現から、「僕」がやってしまったことの重大さを伝えたいのだと思いました。



【画像 7】

られる。この取り出してから押しつぶすまでの一瞬の間に、「僕」がどういう気持ちになったかを考えてほしい。また、どうしてちょうをつぶしたのかという疑問をもたせ、動機や気持ちなど、読み手の興味を引くためでもある。

<引用文は読み手に何を伝えようとしているか>

「僕」の追いつめられている心境が表れている。ちょうを粉々にしてしまうほど、今までの思い出を「僕」は消したかったということ。

<引用文>

『ちょうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまった。』

<引用文を選んだ理由>

「僕」は、自分で作った思い出を自分で傷つける、自分の手でちょうを粉々に押しつぶしてしまうほどまでに追いつめられている。その後悔や悲しみ、罪悪感や絶望感を感じてほしかった。「一つ一つ取り出し」、までは自分の意志で行っているように捉えられるが、「押しつぶしてしまった」という表現は、感情的になって行動を起こしているように捉え



【画像 8】

見下したりすること。「僕」と「エーミール」は考え方が違うということ。

<引用文>

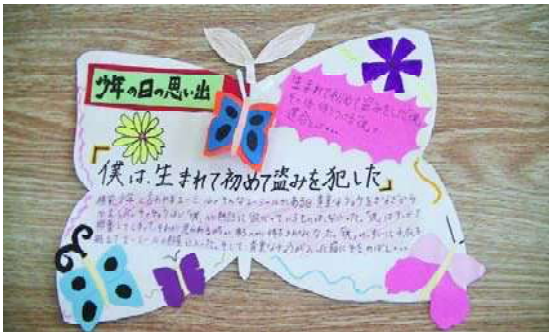
『僕は、その欠点をたいしたものとは考えなかったが、こっぴどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。』

<引用文を選んだ理由>

「僕」は「エーミール」と違う考え方をしているということから、「僕」と「エーミール」の性格の違いがよく分かるから。読み手に、他にどのような場面で2人の考え方が違うのか、興味をもってほしいから。

<引用文は読み手に何を伝えようとしているか>

「エーミール」は完璧な少年で、「僕」を少し



【画像 9】

「僕」という人物が盗みを犯してしまうような人柄であるということを表している。また、「生まれて初めて」とあるので、それまでの「僕」の性格や生活が読み手に伝わる。

<引用文>

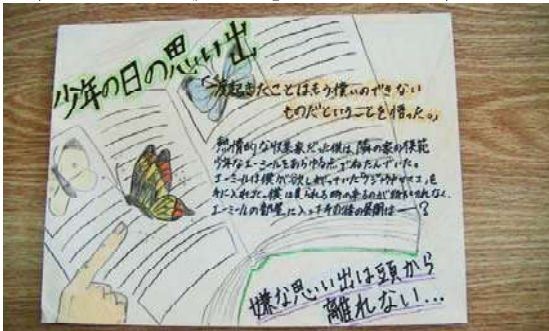
『僕は、生まれて初めて盗みを犯した。』

<引用文を選んだ理由>

読み手が読んだとき、「どんな盗みをしたのか」「なんで盗んでしまったのか」「そこまでして欲しい物は何か」「盗みをした後どうなったのか」などの疑問や、「僕」という人は盗みをしてしまう人なんだなどの人物像が思いつくように、この引用を選びました。盗みをしてしまう動機、その後の展開に興味をもってもらうためです。

<引用文は読み手に何を伝えようとしているか>

「僕」という人物が盗みを犯してしまうような人柄であるということを表している。また、「生まれて初めて」とあるので、それまでの「僕」の性格や生活が読み手に伝わる。

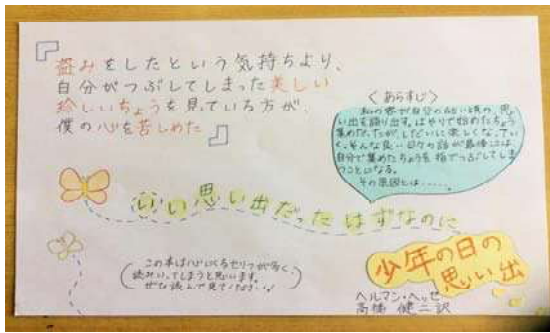


【画像 10】

せられるかなとも思ったので、この文を引用した。

<引用文は読み手に何を伝えようとしているか>

「僕」がようやく、とても悪いことをしたんだと分かったということと、「自分のしたこと責任をもって」ということを伝えたいのだからと思う。罪を犯すと、中には償いのできないこともあり、一度犯してしまった罪は変えることができない、過去を変えることはできない、ということ。嫌な思い出は一生消えないものだからということも伝えたいのだからと思う。



【画像 1 1】

<引用文は読み手に何を伝えようとしているか>

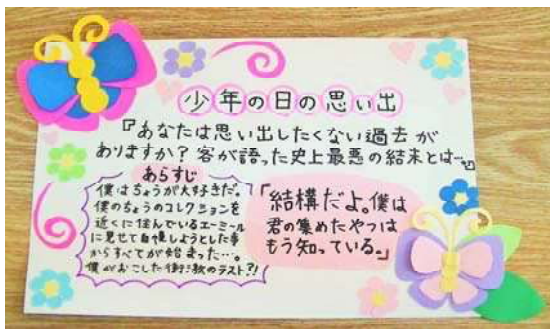
ちょうが「僕」にとってどれほど大事なものかということと、盗みを働いてしまった気持ちと美しいちょうをつぶしてしまった気持ちとを天秤にかけてしまっており、盗んだ行為よりも貴重なちょうをつぶしてしまったことの後悔の気持ちのほうが大きいという、「僕」の身勝手さを伝えている。また、人間らしい複雑な気持ちでもあることから、読み手を共感させるような「僕」の気持ちも伝えていると思う。

<引用文>

『盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちょうを見ている方が、僕の心を苦しめた。』

<引用文を選んだ理由>

「僕」の、人間らしい複雑な気持ちがこの文に表れているため、読み手がこの物語に吸い込まれるだろうと思ったから。盗みは犯罪なのに、それよりも「僕」の心を苦しめるほど少年にとってちょうは他にたとえることのできないほど大切なものだということを感じ取ってほしいから。



【画像 1 2】

「エーミール」に抱いているねたみなどの感情を伝えようとしている。

<引用文>

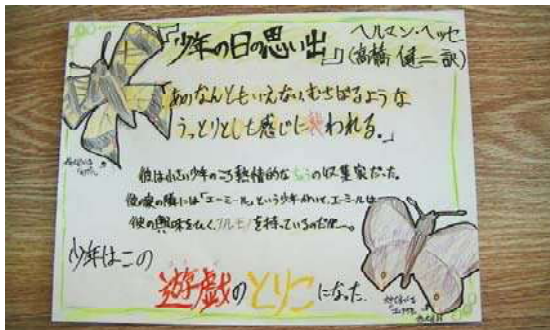
『結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知っている。』

<引用文を選んだ理由>

「エーミール」は「僕」のことを下に見ていて、自分がどれだけ完璧か認識しているように感じられる。うぬぼれている様子。そして、「僕」の集めた自慢のちょうをバカにするような心の冷たい人だと考えられる。そのことを読み手に感じてほしかったから。

<引用文は読み手に何を伝えようとしているか>

「エーミール」の冷たい性格と、「僕」が



【画像 1 3】

<引用文>

『あのなんともいえない、むさぼるような、うっとりした感じに襲われる。』

<引用文を選んだ理由>

「僕」がちょう集めにのめりこんで熱中している様子が分かる表現であり、読み手がその過程を知りたくなるのではないかと思ったから。

<引用文は読み手に何を伝えようとしているか>

「僕」の熱中具合と、「僕」にそう思わせるものがちょうにはあるということ。また、ヘッセの表現の美しさ。

○学習の振り返りをワークシートに書く。

学習の振り返りでは、ただ単に単元を通しての感想を書くのではなく、「この単元の学習で理解したこと、できるようになったこと、難しいと感じたこと」を書かせました。

4. 研究成果

- ① 教師の適切な関与による「能動的な教え合い・学び合い活動」を実践することによって、学習課題の解決に向けて生徒同士で気軽に話し合い、自分の考えを広めたり深めたり、更に自分の考えを再構築したりすることができた。

<振り返りシートより一部抜粋>

- ポップを作ってできるようになったことは、自分のものの見方や考え方を広くすることです。一点だけから見るのではなく、視点を変えて考えることができました。考えを広げることが大切なのが分かりました。教科書の内容を見て終わりではなく、なぜこうなったのか、なぜやったのか、などの自分の考えをもつことが大切だと思いました。発表を通して、同じ考えの人もいたし、違う考えの人もい

て、自分の考えを見直すことができました。

○ポップ作りをしてみてできるようになったことは、友達と教え合いをしたことです。ポップ作りについてアドバイスをもらったり、アドバイスをしたりして、良い作品になるようにしたことが良かったと思います。友達と意見を出し合っているうちにいろんなことに気づけたりすることができたので良かったです。

→ 発表者が下線を付した部分などの振り返りから、「問題解決に対して生徒同士で気軽に話し合えたり、問題を解決できたり、自分の考えを広めたり深めたり、更に自分の考えを再構築したりすることができた」と捉えることができます。

② 教師の適切な関与による「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れることで、自分の考えを根拠を明確に自信をもって述べる可以增加する生徒が増えた。

<振り返りシートより一部抜粋>

○引用文を選んだ理由がはっきり分かりやすく言えたり、具体的にも述べられたので良かったと思います。自分の考えをもち、「少年の日の思い出」を紹介することができました。共感し、疑問をもったりしながら自分のものの見方や考え方を広げ、自分の考えを述べられたと思います。

○できるようになったことは、人前でしっかり発表できるようになったことです。最初は班で発表してそのあと自信をもってクラスに話せたので、できるようになったと思います。このポップ作りは自分にとって経験値がいっぱいある課題だと思いました。例えば、人前で話せなくても自信をもっていけばすらすらと話せるようになるなど、自分のためになるからです。

→ 発表者が下線を付した部分などの振り返りから、「自分の考えを根拠を明確に自信をもって述べる可以增加する生徒が増えた」と捉えることができます。

③ 国語科の学習内容を明確にし、見通しをもって学習し、学習後に振り返ることで、「理解できた時の喜び」や、「理解できないことの悔しさ」といった気持ちを感じる機会が増え、学習意欲が高まった生徒が増えた。

<振り返りシートより一部抜粋>

○できるようになったことは、文章から何が表されているか、それを考えて自分の意見をもつことです。例えば、少年が言っている言葉や行動から、少年の性格、感情などを自分で考えられるようになりました。物語について理解したり考えたりする力がついて、自分的に少し成長ができたと思います。できるようになったことが一つでも増えたのでうれしいです。

○難しかったのが紹介文（あらすじ）のところ、どうしようか悩みました。そこで、実際に本屋さんに行って見てきました。私は、実際にものを見るのはすごくいいなと実感しました。

○私は、なかなか紹介文やキャッチコピーが思いつきませんでした。それはきっと、まだ『少年の日の思い出』の話をしっかりと理解できていなかったからだだと思います。だけど何回も読み直してみると、登場人物の心の細かいところも少しずつ分かり、完成させることができました。このポップ作りをしなければこんなに読み返さず、分からないところそのままにしていたと思うので、きちんと話を理解するという良い機会になったと思います。これからはどんな話でも、自分がその話をしっかりと理解できるまで読み返していきます。

○この話には分からない言葉がたくさんあって、私は13個も調べて、すぐには覚えられないので、教科書でその言葉が出てくるたびにノートで確認していました。でも何度も繰り返しているうちに頭に入ってきて、今はほとんど覚えています。今回こんなに覚えられたので、これからは多分こんな意味かなと漢字から想像して、あっているかどうかをスマホではなく国語辞典で調べ、身につけられたらいいなと思います。

○あらすじを書くとき「少年の日の思い出」をまとめて書くことが苦手で、友達がどんな感じに書いてあるかを見てもうまく書けなくてずっと悩んで、やっと苦手だったあらすじを書くことができました。発表会の時、班の皆が「あらすじがま

とまわっていて良かった」などと言ってくれてうれしかったです。

- 発表者が下線を付した部分などの振り返りから、「理解できた時の喜び」や、「理解できないことの悔しさ」といった気持ちを感じる機会が増え、学習意欲が高まった生徒が増えた」と捉えることができます。

5. 今後の課題

- ① 学習支援が必要な生徒で、「能動的な教え合い・学び合い活動」に参加しない、入れない生徒が、学年内に数人いた。そのような生徒は、自ら周囲との関係を切ってしまうようなところがある。教師側からのアプローチばかりでなく、学習者が能動的に学習することを目指し、そのような生徒への手立てを考えていく必要がある。
- ② あれこれと欲張らず、指導内容を絞る。例えば、今回の研究授業の内容で言うと、引用文とキャッチコピーの両方、更にあらすじまで考えさせたこと。読みを深めさせるための手段として、「引用文」と「引用文を選んだ理由」、「引用文が伝えようとしていること」を考えさせたが、キャッチコピーやあらすじも盛り込んだために、本来の目的がぼやけてしまった。「つけさせたい力」のために、指導内容を吟味して絞る必要がある。
- ③ 評価の観点を生徒にしっかり意識させきれなかった。研究授業の発表会では、良い作品の評価の観点を事前に示して説明しておいたものの、発表後の質問・意見・感想タイムでは、内容的なことよりもデザインや発表態度などについての感想の方が多く出てしまった。生徒たちには、本来の目標や評価についてもっと説明し、しっかりと意識させておく必要がある。

6. おわりに

今回の研究を通して、過去に実践していたものを更に深め、今後へつなげることができました。昨年度、1学年を担当し、今年度は2学年を担当しています。この実践を継続し、更に進化させていきたいと考えています。

また、この研究を機に、他市の研究実践の見学に伺わせて頂いたり、最新の研究実践についての書籍に目を通したり、指導主事の先生方や市内の国語科の先生方、本校の先生方からたくさんの御教授を賜ったりなど、大変勉強をさせて頂きました。様々な先生方が子供たちのために、日々真剣に研究や実践に取り組んでいらっしゃることを肌で感じることができました。

研究という分野が人一倍苦手な私にとって困難に感じることも多かったです。どんな場面でも前向きに、大変温かくご指導くださった皆様に、心から感謝しております。この場をお借りして、御礼を申し上げます。

7. 参考文献

- ・高木展郎 著 (2015年：三省堂)
『変わる学力、変える授業。 21世紀を生き抜く力とは』

8. 指導資料 (国語科学習指導案、学習プラン、ワークシート、年間指導計画等)